

総説

自閉スペクトラム症児・者の性の実態と課題

大河内彩子*、金森弓枝*、谷川千春*、秋月百合*

Sexuality, sexual attitudes, sexual behaviors in adolescents and adults with autism spectrum disorders: Reality and challenges

Ayako Okochi*, Yumie Kanamori*, Chiharu Tanigawa*, Yuri Akizuki*

Key words: Autism spectrum disorder (ASD), stigma, gender identity, sexual orientation, sexuality education

受付日 2023 年 10 月 20 日 採択日 2023 年 12 月 26 日

*熊本大学大学院生命科学研究部看護学分野

投稿責任者：大河内彩子 okochi@kumamoto-u.ac.jp

I. 緒言

自閉スペクトラム症 (Autism spectrum disorders: ASD) と性の問題を取り上げた研究が近年、発表されている。まず、性自認の悩みを抱えた若者が多いことが知られるようになった。2010 年に出版されたオランダの研究が、ジェンダー専門外来を受診した子ども・青年において、自閉スペクトラム症と診断された者の割合が高いことを報告し注目を集めた¹⁾。その後、生まれ持った生物学的な性別と性自認が異なる場合に、違和感やストレス、不快感を覚えることを意味する性別違和と自閉スペクトラム症の関連を取り上げる論文が増加している²⁾。次に、自閉スペクトラム症児・者の性的指向の特徴にも着目されるようになった。自閉スペクトラム症の講演活動を行っていたアメリカ人の青年が、2010 年に児童ポルノ所持で逮捕された³⁾事件が契機となっている。その後、多くの調査から自閉スペクトラム症を持つ青少年では、同性愛・両性愛・無性愛である割合が高いことが示されている⁴⁾。このように、自閉スペクトラム症児・者において、慣習的に受け入れられている性別や性愛の考え方とは違った性を有することで、悩みやトラブルを抱える場合が多いことが海外で示されてきた。しかし、彼らの多様な性の実態が

知られるようになってから日が浅く、当事者の経験や苦悩の把握は海外でも喫緊の課題である。

海外の動きを受けて、我が国でも自閉スペクトラム症等の発達障害を有する人々の性の状況や問題・課題が取り上げられるようになってきた。日本発達障害学会はその機関誌『発達障害研究』において、2023 年に「特集 発達障害と性」を組んだ。その特集の内容は、思春期の二次性徴と対人関係の混乱⁵⁾、性同一性の課題⁶⁾、性暴力被害⁷⁾、性問題行動⁸⁾、性教育⁹⁾、女子・女性¹⁰⁾である。このように多彩な内容の特集記事が組まれた一方で、本邦では調査研究は殆ど実施されておらず、実態は不明である。よって、本邦でも自閉スペクトラム症児・者の性の状況や悩みに関する調査研究を集約し、知見を整理する必要がある。

性と一口に言っても性自認・性的指向・性行動・性意識・生殖などの要素があり、これらは互いに不可分である。例えば、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー・クエスチョニングを包括する言葉として「LGBTQ」があるが、「LGB」は性的指向に関することであり、「T」は性自認に関することであり、「Q」は性自認や性的指向に関することである。よって、性に関する言説ではこれらが包括的に記述されていることが多い。さらに、昨今

の若者全体で性が歴史的に変容してきている。青少年の性行動全国調査を 1971 年から行ってきた林らによると、2005 年以降、中高生における性への関心の低下や高校・大学生における交際経験なしの増加が観察されている¹¹⁾。また、2000 年代に入ってからスマートフォンの普及により、ソーシャルメディアが身近になり、交際相手の出会い方という性行動に変化が生じている¹²⁾。出会い系サイトやマッチングアプリの普及により希望通りのスペックをもつ相手との出会いを手軽に求めることが可能になり、旧来の偶然や努力に左右される恋愛や性行動は減少したと推察されている¹²⁾。このように、現在は若者の性を様々な言説が取り巻いている。

若者全体に生じている性の歴史的変容から、自閉スペクトラム症児・者は、さらに複雑な性の悩みを経験している可能性がある。よって、林らの調査プロジェクトや『発達障害研究』に見られるような複合的アプローチを用いることで、彼らの性の実態を的確に把握する必要がある。本研究では、自閉スペクトラム症児・者の性の実態や課題について、包括的・網羅的に文献を収集し体系的に整理することで最新の知見を明らかにする。そして、国内外の調査研究のテーマや方法を比較することで、その特徴を明らかにする。さらに、調査研究の結果を集約することで、対象児・者の性の実態のストーリーを描き出す。最終的に、研究・支援上の示唆を得て自閉スペクトラム症児・者の性の健康に貢献することを目的とする。

II. 方法

Pubmed と医学中央雑誌を検索エンジンとして用いた。Pubmed の検索式を(((autism[MeSH Terms]) OR (autism spectrum disorder[MeSH Terms])) OR (autistic disorder[MeSH Terms])) AND (((sexuality[MeSH Terms]) OR (sexual behavior[MeSH Terms]) OR (sex behavior[MeSH Terms])) OR (sexual attitudes[MeSH Terms]))とした。一方、医学中央雑誌の検索式を((自閉症スペクトラム障害/TH or 自閉症スペクトラム/AL) OR (自閉症/TH or 自閉症/AL) OR (小児発達障害-広汎性/TH or 広汎性発達障害/AL)) AND ((性行動

/TH or 性行動/AL) OR (性意識/AL))とした。日本語文献では、自閉症の下位分類が廃止された後も「発達障害」を用いている研究があるため、検索語に取り入れた。また、日本語の「性」は sex (生まれついで性、性別)、sexuality(性自認、性的指向)、gender(社会的・文化的な性:ジェンダー)等の多様な意味があり、全く関連しない文献が多数検索されてしまうため、用いなかった。

対象文献を精読し、研究の概要を整理した。次に、対象者の属性、疾患や性自認等が多様であったため、特徴を整理した。さらに、性の実態を明らかにするために、性自認・性的指向や性に関する行動・態度・知識・教育の現状や課題に関する各文献の調査結果に関して、質的分析を行った。原文の意味を損なわないように調査結果の記述内容を要約してコード (<>) とし、共通性・相違性に着目して整理し、抽象度を上げながらサブカテゴリ (《》)、カテゴリ (【】) を生成した。

III. 結果

1. 検索結果

Pubmed では上記検索式により 159 件が得られ、そのうち英語、最新 5 年のフィルターをかけると 58 件になった。この 58 件から無料で入手可能であった 10 件のタイトルを確認し、レビュー 1 件、レスポンスレーター 1 件を除外した。次に、医学中央雑誌では上記検索式により 137 件が得られ、抄録あり、原著論文、会議録除く、最新 5 年のフィルターをかけると 19 件になった。この 19 件から解説・総説、事例、診療録、タイトル・抄録に性に関する記載のない文献を除くと 2 件になった。よって、対象文献は両検索エンジンから得られた 10 件とした。

2. 対象文献の概要 (表 1)

調査地は米国 2 件^{13,18)}、スペイン・オランダ・イギリスが各 1 件^{14,19,20)}、ブラジル 1 件¹⁶⁾、オーストラリア 1 件¹⁷⁾、イラン 1 件¹⁵⁾、日本 2 件²¹⁻²²⁾であった。人数は 14-295 名であった。最小人数の研究¹⁶⁾は、通常学級在籍の自閉症児を対象とした質的研究である。最大人数の研究¹⁷⁾は、自閉症女性 134 名と非自閉症女性 161 名を対象とした量的研究である。

表 1 文献の概要

ID	文献	年	国	目的	対象と方法	結果
1	13	2023	米	性的健康に関する自閉症成人の社会的言語能力を研究することで、言語の社会的使用の具体的な洞察を提供する。	自閉症のある若年成人(n=27; 知的障害なし; 性別は女性9名、男性18名; 性自認はシスジェンダー20名、クエスチョニング3名、トランスジェンダー2名、その他1名; 性的指向は異性愛14名、両性愛5名、同性愛3名、無性愛3名)とない若年成人(n=122)において、性的知識、性的経験、語用論的言語能力を統計的に比較した。	性教育受講経験と性的知識はグループ間で差はなかった。しかし、自閉症成人は、パートナー経験が有意に少なく語用論的言語に障害があった。両群とも語用論的スキルは、一般的なコミュニケーション能力以上に正確な性知識を予測した。
2	14	2023	西	教育や医療に携わる専門家の視点から、ASDの若者の情緒的・性的なニーズを分析する。	質的研究。半構造化フォーカス・グループ・セッション。質的研究。5年以上の経験を有する教育・保健分野の専門職18名が4グループで討議。	専門家たちは、性的な保健の訓練が不十分と認識。性的なニーズへの取り組みは、ASDの子供や青少年の治療協力を得る助けになる。専門家は家族と協力して共同目標を設定することで、性教育と情操教育に適切に取り組むことができる。
3	15	2022	ス	ASD児の性的行動に対処する際のイラン人の親の心理的苦痛の経験を探る。	質的研究。内容分析アプローチ。半構造化面接と詳細面接をASDの子どもを持つ27名の親に行った。	1) 心理的脆弱性、2) 意図しない社会的結果、3) 心理的苦痛、4) 子どもの性生活の将来に対する戸惑いという4つのカテゴリーが得られた。子どもの性行動に対する親の懸念に注意を払うことが重要。
4	16	2021	伯	自閉症者のセクシュアリティのニーズを明らかにする。	質的研究。通常学校在籍の自閉症児14名(男性8名、女性5名、ジェンダーニュートラル1名)を対象に半構造化インタビュー、テーマ別内容分析を実施。	「言説のプロセスと“青い天使”のイメージ」、「多様性の中の多様性: 特異なプロセスとしての自閉症者のセクシュアリティ」という2カテゴリーが特定された。効果的な性教育と支援活動の確立には、パラダイム転換が必要。
5	17	2020	豪	自閉症女性におけるジェンダーと性の多様性を調査し、否定的・望まない性的出会いの割合を調べる。	性行動尺度(SBS-III)の回答を自閉症女性134名(知的障害なし; 性自認は女性108名、男性4名、その他22名; 性的指向はホモセクシュアル、異性愛者、バイセクシュアル)と非自閉症女性161名の間で統計的に比較した。	自閉症女性は、トランスジェンダーの性自認および非異性愛の性的指向が高かった。自閉的同性愛女性は、否定的・望まない性的経験を体験している可能性が高かった。自閉症サンプルでは、性同一性による否定的性体験の差はなかった。
6	18	2020	米	Supporting Teens with Autism on Relationships (STAR)プログラムの実現可能性、受容性、予備的な有効性を評価する。	介入研究。ASDのある青少年84名(知的障害なし; 性別は男性68名、女性16名)と親に性教育プログラム(STAR)を実施。親向けのマニュアルと対話型人間関係ゲームを含む。質的・量的に評価。	STARプログラムの実施可能性と受容性は全体的に高く、親と若者のセクシュアリティに関する知識を高めるのに有効であった。子どもとセクシュアリティについて話し合うことに関する親の効力に改善があることが予備的に支持された。
7	19	2020	蘭	自閉症者、家族、研究者、臨床家の意見に基づき、今後の研究の必要性について報告する。	質的研究。ノミナルグループテクニックで最重要研究課題を決定。65名(LGBT+を自認するグループを含む、知的障害なし)が8つのグループに参加。	セクシュアリティと人間関係の幸福の支援方法開発に焦点を当て、自閉症者の理解を深めるべきである。また、ステレオタイプやスティグマの影響の研究が必要。参加型研究は重要。
8	20	2019	英	OS者の性的感情を実証し、OSが自閉症と共感覚と関連していることを示す。	2群比較。34名のOS(OS中、女性18名、男性5名、その他11名)と88名の対照者がOSや共感覚を測定するアンケートや書記素一人格一貫性テストに回答した。	OSが無生物に対して感情的、恋愛の、性的感情を抱くことを初めて実証した。OSは自閉症と診断される割合が有意に高く、共感覚の有病率も有意に高かった。
9	21	2019	日	ASD児の保護者の性の悩みの実態を解明し、教育・福祉における支援の方向性を見出す。	親の会の保護者69名(子どもの68%に知的障害あり)に対する質問紙調査。3名の保護者と5名の特別支援学校高等部教諭に対する面接調査。	子どもの知的障害の合併により悩みの時期が長引くことが示された。対象者からの学校教育への期待は高く、相談や研修機会の提供が求められていた。
10	22	2019	日	全国の発達障害児・者の属性背景が家庭での性教育実施にどのように関連しているか検討する。	親の会の保護者253名に対する自記式無記名質問紙調査。	家庭での性教育は女兒では母親のみ、男児では父親のみ・両親での実施が多く、小学部までは成長に合わせた実施が多かった。「人間関係」「結婚・性交」「性に関する問題行動等」が、軽度者で重度者よりも実施されていた。

ASD: Autism Spectrum Disorder; 自閉スペクトラム症、AQ: the Autism Spectrum Quotient、SBS-III: Sexual Behaviour Scale-III、SM: Social Media、OS: Objectum sexuality; 物への性愛、米: アメリカ、西: スペイン、ス: イラン、伯: ブラジル、豪: オーストラリア、蘭: オランダ、英: イギリス、日: 日本

表 2 対象文献にみる自閉スペクトラム症児・者の性の実態と課題

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
多様な性自認 や性的指向を 持つ	多様な性自認を持つ	自閉スペクトラム症児・者は生物学性と性自認が一致しない場合がある 自閉スペクトラム症女性は、トランスジェンダーの性自認が有意に多い
	多様な性的指向を持つ	OS群には自閉スペクトラム症の診断が有意に多い 自閉スペクトラム症女性は非異性愛の性的指向が有意に高い
性的知識や社 会性、人間関係 に課題がある	性的知識が不足もしくは偏る	自閉スペクトラム症児・者はインターネットから性的情報を過剰に収集する 自閉スペクトラム症児・者は恋愛や性的関係の知識が不足している 自閉スペクトラム症若年成人は社会的言語スキルや性的語彙の正確さが劣る
	社会的スキルが不足している	OS群は社会的スキル因子で自閉スペクトラム症の特性が強い 自閉スペクトラム症児・者はコミュニケーションが独特で社交や恋愛が難しい
	パートナーとの関係に課題がある	自閉スペクトラム症児・者はパートナーと特異な社会関係を持ちやすい 自閉スペクトラム症若年成人はパートナーがいる経験が有意に少ない
スティグマや 誤った神話が 課される	スティグマを課されやすい	自閉スペクトラム症女子が性的ニードを要求するとスティグマ化される 自閉スペクトラム症児・者は多様な性自認や性的指向により障害扱いされる
	永遠の子どもだと思われる	自閉スペクトラム症児・者は他者に対して性的魅力を感じないと思われる 自閉スペクトラム症児・者は無垢な永遠の子どもだと思われる
性行動や性被 害の問題があ る	性的問題行動を起こすこともある	自閉スペクトラム症児・者は不適切な性的行動や性的発言がある 自閉スペクトラム症者の性(再)犯罪を予防する研究が必要である
	否定的な性体験や性被害を受けやすい	自閉スペクトラム症の同性愛女性は、否定的・望まない性体験の可能性が高い 自閉スペクトラム症児・者は家庭で性被害者になりやすい 親は自閉スペクトラム症児が性被害者になるのを恐れる
性的ニードに関 する支援を受け るのは難しい	保護対象と見なされる	自閉スペクトラム症児・者は保護対象と見なされ、性を禁止される 保護者にとって結婚・性行に関する家庭での性教育の重要度は低い
	性的ニードを周囲が理解していない	自閉スペクトラム症児・者の性的ニードを親や他者が理解していない 自閉スペクトラム症児の性教育のカリキュラムは明確に位置付けられていない
経験を当事者 参加により明ら かにする必要 がある	性の経験を明らかにする必要がある	知的障害合併者のセクシュアリティと人間関係の発達の研究が必要である 性的マイノリティの自閉スペクトラム症者の経験を明らかにする必要がある
	特異な感覚があり、性に影響がある	自閉スペクトラム症者に多いOSには共感覚保有者が多い 自閉スペクトラム症児・者は身体的な感覚を身体的な方法で表現する 自閉スペクトラム症児・者の性の指導には視覚的情報が有効である
	当事者の参加が必要である	参加型研究が必要である 自閉スペクトラム症児・者は、両親との議論や「障害」を不快に感じる 当事者同士の集まりでの情報交換が有効と保護者から考えられている
親は子の性的 課題により心理 社会的苦痛を 抱く	親には子どもの性に関する悩みがある	自閉スペクトラム症児・者の親は子どもの性に関する悩みやストレスがある 親は他者の自閉スペクトラム症児への不適切な対応や反応が不安である
	親の社会関係に悪影響が出る	親は夫婦関係が自閉スペクトラム症児の子育てにより消滅したことに動揺する 親は社会的に孤立したり、育て方が悪いと判断されるのが不安である
性教育には連 携が必要であ る	性教育の考え方が家庭や支援者によって異なる	教員や保護者により性教育の内容の認識に差異がある 教材とビデオゲームを活用した性教育プログラムの有用性が証明された 子どもの属性・背景により保護者の考える家庭での性教育の必要度は異なる
	専門家の支援にも限界がある	教育職は自閉スペクトラム症児・者の性に関する訓練を受けていない 専門家の実践に役立つ調査や研究が不足している
	関係者の連携が必要である	教育職にとって親や医学専門職との連携は不可欠である 性と人間関係を支援するために、家族と専門家の関与が課題である

OS: Objectum sexuality; 物への性愛者

研究テーマとしては、自閉スペクトラム症児・者の性に関するニード・経験・性的指向・社会的能力・感覚に着目していた。また、イラン人¹⁵⁾や日本人の親の悩みを取り上げていた²¹⁾。研究方法としては、量的研究 4 件^{13, 17, 20, 22)}、質的研究 4 件^{14, 15, 16, 19)}、量および質的研究 1 件²¹⁾、介入研究 1 件¹⁸⁾であった。自閉スペクトラム症を持つ本人（当事者）を含むのは量的研究では 3 件^{13, 17, 20)}、質的研究では 2 件^{16, 19)}であり、全て海外文献であった。記載なしの 1 件¹⁹⁾を除く全ての文献が、10 歳代の若者の性に関する内容を含んでいた。海外文献の 4 件^{13, 17-19)}は知的障害のない高機能者を対象としていたが、国内文献の 2 件^{21, 22)}は知的障害の合併の割合が高かった。性自認や性的指向を記載した論文が 5 件^{13, 16, 17, 19, 20)}あった。本人の性自認はシスジェンダー以外に、トランスジェンダー、クエスチョニング、ノンバイナリー¹³⁾、ジェンダーニュートラル¹⁶⁾があった。性的指向は、異性愛以外にホモセクシュアル、バイセクシュアル、無性愛者^{13, 17)}、物への性愛者（Objectum sexuality、以下 OS とする）²⁰⁾があった。

3. 対象文献にみる自閉スペクトラム症児・者の性の実態と課題（表 2）

43 コード、19 サブカテゴリ、8 カテゴリが得られた。＜自閉スペクトラム症女性は、トランスジェンダーの性自認が有意に多い＞といった「多様な性自認を持つ」ことや＜OS 群には自閉スペクトラム症の診断が有意に多い＞のように「多様な性的指向を持つ」ことがあり、自閉スペクトラム症児・者は【多様な性自認や性的指向を持つ】。また、＜自閉スペクトラム症児・者はインターネットから性的情報を過剰に収集する＞のように「性的知識が不足もしくは偏る」こと、＜自閉スペクトラム症児・者はコミュニケーションが独特で社交や恋愛が難しい＞ように「社会的スキルが不足している」こと、＜自閉スペクトラム症児・者はパートナーと特異な社会関係を持ちやすい＞のように「パートナーとの関係に課題がある」ことが生じ、【性的知識や社会性、人間関係に課題がある】。しかも、＜自閉スペクトラム症女子が性的ニードを要求するとスティグマ化される＞ように「スティグマを課されやすい」状況にあり、＜自閉スペクトラム症児・者は他者に対して性的魅力

を感じないと思われる＞ように「永遠の子どもだと思われる」ため、社会から【スティグマや誤った神話が課される】ようだ。さらに、＜自閉スペクトラム症者の性（再）犯罪を予防する研究が必要である＞と指摘されるほど「性的問題行動を起こすこともある」一方で、＜自閉スペクトラム症の同性愛女性は、否定的・望まない性体験の可能性が高い＞ように「否定的な性体験や性被害を受けやす」く、【性行動や性被害の問題がある】。一方で、＜自閉スペクトラム症児・者は保護対象と見なされ、性を禁止される＞ように「保護対象と見なされる」こと、＜自閉スペクトラム症児・者の性的ニードを親や他者が理解していない＞ように「性的ニードを周囲が理解していない」ことから【性的ニードに関する支援を受けるのは難しい】状況にある。よって、＜性的マイノリティの自閉スペクトラム症者の経験を明らかにする必要がある＞など「性の経験を明らかにする必要がある」こと、＜自閉症者に多い OS には共感覚保有者が多い＞ように「特異な感覚があり、性に影響がある」こと、＜参加型研究が必要である＞のように「当事者の参加が必要である」ことが述べられており、【経験を当事者参加により明らかにする必要がある】とまとめられた。また、「親には子どもの性に関する悩みがある」、「親の社会関係に悪影響が出る」のように【親は子の性的課題により心理社会的苦痛を抱く】ことが述べられていた。そして、「性教育の考え方が家庭や支援者によって異なる」、「専門家の支援にも限界がある」、「関係者の連携が必要である」といった支援の現状があり、【性教育には連携が必要である】とまとめられた。

IV. 考察

1. 対象文献にみる調査方法や対象者の特徴

本研究は、自閉スペクトラム症児・者の性に関する幅広いトピックを国内外の最新文献から整理し、現状や課題を明らかにすることで性の実態を描き出した。取り上げた 10 文献の調査地はアメリカ^{13, 16, 18)}・ヨーロッパ^{14, 19, 20)}・中東¹⁵⁾・アジア^{21, 22)}・オセアニア¹⁷⁾であり、西側諸国を中心としてグローバルに分布していることが明らかになった。比較的保守

的と考えられる中東や日本の調査もあり、親の苦悩が取り上げられていた^{15,21)}。自閉スペクトラム症児・者の性の現状把握が世界で喫緊の課題になっている⁴⁾ことが本研究からも確認できた。

テーマや方法の特徴として、国外文献では、自閉スペクトラム症をもつ本人のニード^{16,18,19)}・経験^{13,16,17)}・性的指向^{13,17,19)}・社会的能力¹³⁾・感覚²⁰⁾を質や量的手法により明らかにした研究が多いことが明らかになった。そして、国外文献ではこれらのテーマの検討のプロセスとして、性自認・性的指向が明記されている研究があることが示された。例えば Kohn¹³⁾ は、診断基準を厳密に適用したサンプルにおいて、性自認・性的指向を子細に把握した上で、社会的言語能力が劣ることが実用的な性的知識の不足と関連することを統計的に示していた。また、Pecora¹⁷⁾ は、生物学的性は女性でも性自認や性的指向がマイノリティである者を含むことを述べた上で、自閉スペクトラム症女性の否定的な性体験の多さを指摘していた。このような国外文献の対象者把握の方法を参照すると、性自認や性的指向が多様な自閉スペクトラム症児・者^{1,2)}では、性別以外の性に関する情報を丁寧に把握した上でテーマの検討を行うべきだと考えられた。一方、国内文献^{21,22)}は親の会を経由した調査であり、知的障害合併例が多いことが本レビューで示された。国外文献で性自認・性的指向を明らかにできているのは高機能者に限定した調査のためである。親の保護的な捉え方と子どものニードは異なる可能性がある^{14,18)}。本邦でも本人を対象とした調査研究を行うことで、当事者の経験やニードをより正確に把握することができるのではないかと考えられた。

2. 対象文献にみる自閉スペクトラム症児・者の性の実態と課題

本レビューにより生成された 8 カテゴリーについて考察する。第 1 に、【多様な性自認や性的指向を持つ】は、性自認の悩みを訴える自閉スペクトラム症児・者に関する研究の増加²⁾という世界的なトレンドを反映しているのではないかと考えられた。第 2 に、【性的知識や社会性、人間関係に課題がある】は自閉スペクトラム症児・者の性の悩みの背景にある社会性の課題に焦点が当たっていると考えられた。

自閉スペクトラム症児・者は社交スキルが不足しているため親密な関係の形成や維持が難しい^{13-15,18)}と指摘されている。また、こうした社会性の課題により、仲間内でのコミュニケーションを介した性的知識の収集や修正が起こりにくい¹³⁾。そして、極端なケースでは社会的スキルの不足により仲間から排除され、性自認や性的指向が未確立のままインターネットに逃げ込み、性犯罪に至ってしまった当事者の例もある³⁾。本カテゴリは、自閉スペクトラム症児・者の性の悩みと障害特性に関する従来の知見と一致すると考えられた。第 3 に、【スティグマや誤った神話が課される】は、障害や性的マイノリティに対するスティグマ・レッテルを課される当事者の苦悩を表していると考えられた。自閉スペクトラム症児・者は無性愛者というステレオタイプな見方をされることがある²³⁾。しかも、性的マイノリティや自閉スペクトラム症であることは社会からスティグマを課されやすい^{6,10,16)}。しかもそのスティグマを内在化させる²³⁾ことで性の悩みを相談しない傾向があり³⁾、結果として性の衝動をコントロールできないことが懸念されている⁸⁾。自閉スペクトラム症児・者を持ち、性的マイノリティでもある人々のスティグマやその内在化による性への影響に関する研究が今後不可欠であると考えられた。第 4 に、【性行動や性被害の問題がある】には、自閉スペクトラム症児・者の性行動や性加害や性被害の問題が反映されていると考えられた。自閉スペクトラム症児・者の性行動は性のマナーの無知²¹⁾と性犯罪¹⁹⁾の両方が指摘されていた。性被害は男女ともに想定されていたが¹⁵⁾、特に自閉スペクトラム症かつ同性愛女性で望まない性体験の割合が高かった¹⁶⁾。自閉スペクトラム症女性では、スティグマを意識することで障害を隠すカムフラージュが多く¹⁰⁾、結果的に性被害に遭いやすいことが懸念されている⁷⁾。今後、自閉スペクトラム症かつ性的マイノリティでもある女性の性被害の問題に焦点が当てられるべきである。第 5 に、【性的ニードに関する支援を受けるのは難しい】は、自閉スペクトラム症児・者の性的ニードに対する周囲の保護的な対応^{14,15)}や無理解^{16,18,22)}が反映されたと考えられた。第 6 に、【経験を当事者参加により明らかにする必要がある】は、自閉スペクトラム症児・者

の性の経験について、OS と共感覚²⁰⁾等の当事者にしかわからない感覚特性を含めて、当事者参加型により明らかにすべきだという研究者および関係者の声¹⁹⁾が反映されたと考えられた。本邦では感覚過敏の性別違和や異性装に対する影響は症例として報告されている⁶⁾が、書記素という文字と色に対するテストやアンケートを用いて感覚を実証的に把握し、性への影響を明らかにした²⁰⁾研究は殆ど見られない。今後、感覚と性に関して当事者の意見に基づく実証研究が進められることが期待される。

第7に、【親は子の性的課題により心理社会的苦痛を抱く】は、自閉スペクトラム症児・者の親には深刻な悩みがあり^{14, 15, 21)}、それは無力感や社会的孤立、夫婦関係の破綻に起因する¹⁵⁾ことを示している。親の孤立感の解消や性的健康の保障は支援者の今後の課題であると考えられた。第8に、【性教育には連携が必要である】は性教育や専門家の知識に限界がある中で連携することの重要性を示していると考えられた。性教育はセクシュアリティ教育とも言われ、2009年にはユネスコが中心になり「性と生の健康」という考えに基づいて『国際セクシュアリティ教育ガイドンス』が作成された⁹⁾。本レビューでも人間関係を学ぶ、対話型ビデオゲームを活用した性教育プログラムという先進的な研究¹⁸⁾を取り上げた。しかし、親の態度や価値観^{18, 20)}、専門家の知識不足¹⁴⁾、学校教員や学校の認識¹¹⁾等により性教育の内容や充実度は異なるのが現状である。このような課題に対して連携は不可避であり、多機関連携¹⁴⁾や親との連携¹⁸⁾が今後本邦でも模索されるのではないかと思われる。

3. 本研究の限界と課題

本研究で取り上げた文献には、自閉スペクトラム症の診断が自己申告や不明であったり、知的障害の合併を含む場合があったり、性比や年齢には幅があった。また、自閉スペクトラム症の有無に関わりなく進展している、国内外の文化社会歴史的变化を十分に踏まえてはいない。さらには、国外文献を入手可能なものに限定したことにより得られた情報に偏りがあった可能性がある。今後は、対象者の医学的・社会的条件をより厳密に設定した比較検討をより多くの文献から行うことで、より当事者のニー

ドに沿った支援や研究の示唆を提示できると考える。

文献

- 1) de Vries, A.L., et al: Autism spectrum disorders in gender dysphoric children and adolescents. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 40:930-936, 2010.
- 2) Øien, R.A., et al: Gender Dysphoria, Sexuality and Autism Spectrum Disorders: A Systematic Map Review, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 48:4028-4037, 2018.
- 3) ニック・ドゥビソ: 自閉症スペクトラム障害とセクシュアリティ——なぜぼくは性的問題で逮捕されたのか, 11-154, 明石書店, 東京, 2020.
- 4) Maggio, M.G., et al: Sex and Sexuality in Autism Spectrum Disorders: A Scoping Review on a Neglected but Fundamental Issue, *Brain Sciences*, 12: 1427, 2022.
- 5) 岡田俊: 発達障害のある子の思春期—二次性徴と対人関係の混乱をめぐって—, *発達障害研究*, 45: 95-102, 2023.
- 6) 館農勝: 発達障害と性同一性の課題—LGBTQ+の状態像とその背景—, *発達障害研究*, 45:103-111, 2023.
- 7) 岩田千亜紀: 発達障害と性暴力被害—実態とリスク要因および求められる支援—, *発達障害研究*, 45: 112-121, 2023.
- 8) 宮口幸治: 発達障害の性問題行動とその対応, *発達障害研究*, 45:122-129, 2023.
- 9) 木全和巳: 発達障害のある子どもたちとセクシュアリティ教育実践の課題, *発達障害研究*, 45: 130-139, 2023.
- 10) 砂川芽吹: 発達障害とジェンダー、セックス—自閉スペクトラムのある女の子・女性を中心として, *発達障害研究*, 45: 140-151, 2023.
- 11) 林雄亮: 若者の性の現在地 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える, 3-20, 勁草書房, 東京, 2022.
- 12) 羽瀨一代: 若者の性の現在地: 青少年の性行動全国調査と複合的アプローチから考える, 189-

- 205, 勁草書房,東京,2022.
- 13) Kohn, B.H., et al: Sexual Knowledge, Experiences, and Pragmatic Language in Adults With and Without Autism: Implications for Sex Education, *Journal of Autism Developmental Disorders*, 53: 3770–3786,2023.
- 14) Torralbas-Ortega, J., et al: Affectivity and Sexuality in Adolescents with Autism Spectrum Disorder from the Perspective of Education and Healthcare Professionals: A Qualitative Study, *International Journal of Environmental Research and Public Health*,20: 2497,2023.
- 15) Masoudi, M., et al: Exploring experiences of psychological distress among Iranian parents in dealing with the sexual behaviors of their children with autism spectrum disorder: a qualitative study, *Journal of Medicine and Life*,15:26-33,2022.
- 16) Brillhante, A. V. M, et al: "I am not a blue angel": Sexuality from the perspective of autistic adolescents, *Ciencia e Saude Coletiva*, 26: 417-423, 2021.
- 17) Pecora, L.A., et al: Gender identity, sexual orientation and adverse sexual experiences in autistic females, *Molecular Autism*,11, 57, 2020.
- 18) Pugliese, C.E., et al: Feasibility and preliminary efficacy of a parent-mediated sexual education curriculum for youth with autism spectrum disorders, *Autism*, 24: 64-79, 2020.
- 19) Dewinter, J, et al: INSAR Special Interest Group Report: Stakeholder Perspectives on Priorities for Future Research on Autism, Sexuality, and Intimate Relationships, *Autism Research*, 13: 1248-1257, 2020.
- 20) Simner, J., et al: Objectum sexuality: A sexual orientation linked with autism and synaesthesia, *Scientific Reports*, 9: 1-8, 2019.
- 21) 河本昌也,他:自閉スペクトラム症における性の問題 保護者の悩みと支援についての考察,東京福祉大学・大学院紀要,9:77-85,2019.
- 22) 光武智美,他:発達障害児・者の家庭での性教育実施状況に関する研究,母性衛生,60: 58-65,2019.
- 23) Turnock, A., et al: Understanding Stigma in Autism: A Narrative Review and Theoretical Model, *Autism Adulthood*, 4: 76-91, 2022.